

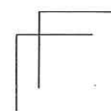
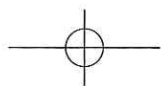
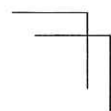
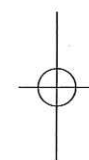
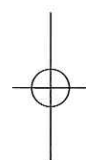
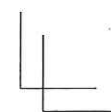
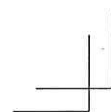
昨日がなければ明日もない

名書	昨日がなければ明日もない
10月23日	12400
三校	
萩原印刷株式会社	

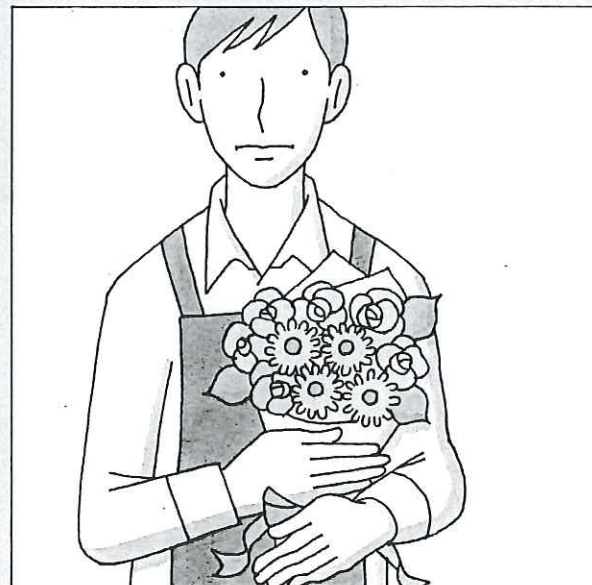
目次

絶対零度	華燭	昨日がなければ明日もない
5	185	275

装画 杉田比呂美
装幀 大久保明子



絶対零度



ツイードのジャケットに細身のパンツ。外から入ってきたときには、紅葉のプリントが鮮やかな大判のストールを肩にかけていた。応接用のテーブルを挟んで向き合い、私が名刺を出すと、かっちりした黒革のバッグから眼鏡を取り出し、鼻先に載せて検分した。淡いワイン色のレンズが薄化粧した顔色によく映える。どこから見ても品のいい婦人だ。歳は五十代後半か。きちんと形を整えた爪に、サーモンピンクとベージュを組み合わせたネイルをほどこしてある。

この婦人が、杉村探偵事務所の記念すべき十人目の依頼人だった。電話をもらったのは昨日の午後のことで、できるだけ早く相談したいという。〈オフィス斃骸〉からの下請け仕事を除けば、私のスケジュールはがら空きだったから、願ってもない話だった。

二〇一一年十一月三日、文化の日。午前十時を五分ほど過ぎたところだ。

「早々に時間をとってください、ありがとうございます」

眼鏡を外して、ご婦人は軽く頭を下げた。

「こちらの事務所のこと、知人に教えてもらいました。その知人も、何ヶ月か前に、友人がちょっとしたトラブルで杉村さんにお世話になったことがあると聞いたとかで——ですから又聞き之又聞きなのです」

私の事務所にとっては、そういうさやかな口コミが命綱だ。その友人氏が過去九人の依頼人のうちの誰なのかはともかく、私の仕事ぶりを気に入ってくれたのなら嬉しい。

「どうぞお気になさらないください。ご覧のとおり、零細なところです。紹介がないと依頼を受けないなんて申し上げません」

秘書も事務員もないから、来客には私が自分でコーヒーを出す。事務所と言えは聞こえはいいが、オフィスビルでもなければ雑居ビルでさえもなく、大家さんの住まいの一角を間借りしているだけだ。ただ、その「住まい」が、増改築を繰り返して複雑怪奇な迷路のようになっ

てしまった大きな屋敷だということだけは、ちょっと珍しいだろうが。

「調査事務所とか探偵事務所とか、そういうところをお訪ねするのも初めてなんです」

「ここにおいでになる方は、ほとんど皆さんがそうですよ」

「最初は、知人が一緒について来てくれるはずだったんですが、体調を崩してしまったとかで……。もともと血圧の高い人なものですから」

緊張しているのか、しきりとまばたきをしながら間を置かずにはしゃべる。

「それに、実を申しますと、これは何ですかその、ただの家庭内の揉め事に過ぎないみたいない気もするのです。わたしが勝手に騒いでいるのかもしれない。ですからまず話を聞いていただいて、本当に調査というか……そういうことをした方がいいのかどうか、そこらでご相談したいのですが」

私はゆっくりと深くうなずいた。

「承知しました。お話を伺いながらメモをとらせていただきますが、よろしいですか」
一瞬、ご婦人は身構えた。

「私の覚え書きです。記録に残すものではありません。ご依頼をお引き受けすることにならなければ、書いたものはこの場で破棄するか、お渡しいたします」

「それでしたら、はい、どうぞ」

答えた声も堅苦しい。

「最初にお名前を確認させてください」

電話では「ハコザキ」と名乗っていた。

「笹崎静子と申します。漢字は、あまり一般的ではない方の〈ハコ〉です」

書いてもらって、納得した。

「主人の実家が特に旧家だというわけでもなし、普通に書きやすい〈箱〉の方が便利なのです」

住まいは埼玉県さいたま市浦和区。一戸建ての家で、家族構成は、

「今は主人とわたしの二人きりです。娘は結婚して相模原市に、息子は転勤で四月から北九州市におりますので」

一息に言って、軽くくちびるを湿した。

「ご相談したいのは、娘のことなんです」

佐々優美、二十七歳、専業主婦。夫は佐々知貴、二十六歳、広告代理店勤務。挙式と入籍は昨年の六月。

「娘も結婚前は勤めておりました。いわゆる寿退社したんです」

「お子さんは」

「まだおりません。早くほしがっていましたけれど、こればかりは授かりものですから」

ほしがっていました。過去形だ。

「現状は、それどころではなくって」

笹崎夫人の眉間にしわが寄った。

「娘は入院しているんです。もう一ヶ月以上になります」

「ご病状が重いのですか」

ぐっとくちびるを噛みしめると、視線を手元に落として、笹崎夫人は言った。

「――自殺未遂をしてしまいました」

十月二日の深夜、自宅の風呂場で手首を切ったのだという。

「幸い、命に別状はありませんでした。でも、精神状態が不安定だということで、救急病院からメンタルクリニックに移って、ずっと入院したままなんです」

心配して当然の事態である。

「ご心痛ですね」

笹崎夫人はうなだれたままだ。頭に重しを載せられているかのように、首筋が強ばっている。

「僭越ですが、私にも娘がおりますので、お気持ちはお察しいたします」

夫人の肩が落ち、口元が震えだした。

「わたしには何が何だかわかりません。どうして娘が自殺未遂なんかしたのか」

「本人はどうおっしゃっているのでしょうか」

笹崎夫人は顔を上げ、私を見た。懊悩と不安が、薄化粧の下から生々しく浮かび上がってきた。

「ですから、わからないんです。入院以来、わたしは一度も娘に会っていません。会わせてもらえないんです。電話もメールも駄目で、優美が今どうしているのか、わたしには全くわからないんです」

〈医療法人清田会 アワー・ハピネス・メンタルクリニック〉

清田会は、大田区内にある総合病院を中心に、リハビリテーション専門病院や老人介護施設、病後児託児所など幅広く医療サービスを展開している医療法人だ。総合病院の開業は一九六二年とあるから、歴史もそこそこ古い。

山手線恵比寿駅近くにあるアワー・ハピネス・メンタルクリニックは、そのなかではもっとも新しい施設だった。開業は二〇〇八年。三階建てのこぢんまりしたビルだ。ホームページ上の映像で見る限り、クリニックというよりはエステサロンのような小洒落た印象を受ける。診療科目は「心療内科」と「精神科」。完全予約制だが、「緊急対応有り」、「入院施設有り」。ノートパソコンを回して、宮崎夫人にモニターを見せた。

「このクリニックで間違いありませんか」

「はい」

老眼鏡の縁を指で押さえて、彼女はうなずいた。

「何度か足を運んでみたんですが、母親ですと言っても、知貴君の許可がない以上は面会できないと断られてしまってます」

「夫の佐々さんが、妻の優美さんの親御さんの面会を断っている？」

「そうです。優美と面会できるのは僕だけですと言ってました」

「医師が、優美さんは面会謝絶だと言っているわけではないんですね」

「担当医の方には会ったことがあります。名前さえ存じません」

クリニックでは、いつも受付で門前払いされているという。娘の夫経由の情報しか入ってこない状態なわけだ。

「最初のうちは、どこに入院しているのかさえ教えてもらえなかったんです。いくら何でも母親のわたしにその仕打ちはないだろうと泣いて頼んだら、渋々教えてくれましたが」

——優美はお義母さんに会いたくないと言ってます。

「それも医師ではなく、夫の佐々さんがそう言ってるんですね」

宮崎夫人はすぐには返事をせず、じっとモニターを見据えた。

「自殺未遂の原因はわたしにある、優美があんなことをしたのは、お義母さんとの関係性に問題があるからなので、こちらとしては絶縁も考えている。今は騒がずに優美をそっとしておいてくださいと言ひ渡されています」

夫人の目の縁が赤くなってきた。

「その発言に、医師の診断の裏付けはあるのでしょうか」

「わかりません。ただ、優美が泣いてそう訴えている、ママにはもう会いたくない、近寄らせないでほしいと」

声が詰まって、喉をぐくりとさせた。

「何を尋ねても、知貴君はその一点張りです。話し合いになりません。優美に悪いからとか言っ、わたしと会ってさえくれないんです。電話で言いたいことを言うばかりで」

夫人はバッグからハンカチを取り出した。目に涙が浮かんできた。

「とにかく顔を合わせて話したいので、勤め先は知っておりますから行ってみたんですが、取り次いでもらえません。日曜日に家を訪ねても——居留守だったのかもしれませんが、出てきませんでした」

目に涙がにじみ、声が乱れ始めた。

「水をお持ちしましょう」

席を立ち、冷蔵庫からミネラルウォーターのボトルとグラスを出してきて、テーブルに並べた。宮崎夫人は目元を押さえ、涙をすすりながら頭を下げた。

私はパソコンをこちらに向けて、このクリニックの評判を検索してみた。

ざっと見る限り、好意的な評価が多い。対応が早い、カウンセラーが優秀、患者の家族のサポートもしてくれる、パニック障害、対人恐怖症、強迫神経症の治療に強い等々。またこのクリニックの入院施設は、主に摂食障害に苦しむ患者の食事療法のためにあるらしい。「緊急対応有り」というのも、自殺未遂や自傷を繰り返す患者を緊急に受け入れて保護する用意があるという意味らしい。

患者本人の書き込みもあれば、保護者や家族のものもある。コメントの言葉選びは、おしなべて常識的な感じがした。

「ごめんなさい、取り乱してしまって」

「お気になさらないでください。現状では、お母様が優美さんのために取り乱すのは当たり前です。ご気分は大丈夫ですか」

「はい」

私はまたパソコンを夫人の方に向けた。

「ウェブで見る限り、きちんとしたクリニックのようですね」

ハンカチを鼻にあてて、宮崎夫人はうなずく。「建物がきれいですし、掃除が行き届いています。雰囲気も明るくて、受付の人も丁寧ですけれど」

「面会はさせてくれないと」

「はい」

「ご家族の他の方はいかがですか。優美さんのお父上と、息子さんは——」

「優美の三つ下の弟です。殺と申します」

「殺さんから、優美さんに連絡はつくんでしょうか」

「駄目です。まるっきりわたしと同じ状態ですから」

夫人は娘のフェイスブックにフレンド登録し、日常的に見ていたそうだが、そちらも自殺未遂があつてからは更新が止まった。

「まめに日記を書いてましたのに」

「その状態では、優美さんの他のフレンドさんたちも心配しているでしょうね」

「ですから知貴君に言ったんです。何かしら説明しないといけないのではないかと」

佐々知貴は、フェイスブックのことは自分が対処する、お義母さんはもう見ないでくださいと応じた。

「それが先月の七日でしたか八日でしたか。気になるので、二、三日してから見たら、閲覧できないように閉じられていました」

「その件で、優美さんのご友人たちから、何かあったのかと宮崎さんの方に問い合わせはありませんでしたか」

「ありません。わたしは、娘の交友関係には疎^とくて」
「そうしますと、優美さんのお友達で、こんなときに宮崎さんが相談できそうなあてもありませんか」

ひどく申し訳なきように、夫人はうなずいた。「すみません」

「お気になさらないでください。成人して結婚している娘さんのことなんですから」

私は、夫人から見えないように気をつけてメモをとった。(要確認・佐々知貴は妻の友人たちはどう説明しているか)。

「殺さんには、宮崎さんから事態をお知らせになったんですね？」

「はい。息子も驚きまして、すぐ知貴君に連絡したそうですが、わたしが聞いた以上の詳しいことは教えてもらえなくて、挙げ句に」

——君には関係ないことだから、口出ししないでくれ。
ずいぶん言われようである。

「息子は遠方にいますし、転勤先でやっと落ち着いたところですから、そう気軽にこちらに来るわけにもいきません。もちろん、心配してくれていますけれど」

宮崎夫人は疲れたようにため息をついた。

「それと夫は……このことを知りません。知らせていないんです」

「何かご事情がありますか」

「夫は、東京電力のグループ会社の役員をしておりますので」

あ、と思った。

「原発事故が起きて以来、休日なしで働いております。五月末からはずっと現地に入ったきり、

わたしもたまに電話で話すぐらいの状態です」

私はうなずいて理解を示すしかなかった。

「大事な娘が自殺未遂などしてしまったのですから、本来なら真っ先に夫に相談したいのですが、でも、今は」

夫人がまた声を詰まらせる。

「とにかく優美に会いたいです」

両手を絞りながら、吐き出した。

「あの子が本当にわたしのせいで自殺未遂をしたのだとしても、一度も言葉も交わさず、これっきり絶縁してしまうのでは、何の解決にもなりませんでしょう。知貴君は、わたしでは優美の力になれず、ただ害になるだけだと言いますけれど、そんな言い分は信じられません。これまでずっと、ごく普通に仲のいい母娘^{おやこ}だと思って暮らしてきましたから」

筋の通った、心情的にもまっとうな訴えである。

「過去に、優美さんと大きな諍^{いさか}いをなされたことはありませんか」

「ありません」

「殺さんには、このことで意見を聞いてみましたか」

またハンカチを鼻にあて、夫人はゆっくりと復唱するように言った。

「自分も、母さんと姉さんは少しばかり仲がよすぎるように思うこともあった。母さんは姉さんに過干渉気味だし、姉さんは母さんに甘えてばかりいる。でも、だからといって姉さんがいきなり自殺未遂するほど病的な関係だとは思わない、と」

落ち着いていた、と言う。

「毅はそういう性格なんです。たいていのことには驚きません。茫洋^{ぼうよう}としていると申しませんか」

本人と話してみないとわかりそうにないが、弟が感情的になっていないというのは助かる。「優美さんに、何か悩みがありそうだと感じたことはありませんか。たとえば夫婦仲とか、夫の両親との関係とか」

夫人はかぶりを振る。「夫婦仲はよかったです。むしろ、いつまでも新婚気分であるようで、わたしの目にはちょっと危なっかしく見えるときがありました」

二人とも二十代だし、結婚して二年半ほどだ。そう不自然なこととも思えない。

「知貴君の実家は新潟の大きな農家で、長男さんがご夫婦で後を継いでいるそうです。わたしどもは、先方のご両親とは結納と結婚式のとくに顔を合わせただけです。常識的な方たちだと思いました。優美からトラブルの話聞いたことはありません」

「経済的な問題はいかがでしょう」

夫人はちょっと思案した。

「優美が仕事を辞めて家庭に入ったのは、さっきも申しましたように、すぐ子供をもうけるつもりだったからです。知貴君もそう望んでいました。子供は三人ほしい、そして子供たちが小学校へあがるぐらいまでは、優美に家庭にいてほしいと。これはわたしも直に彼から聞いたことがあります。ただ——」

また眉間にしわを寄せ、言いよどむ。

「実際に二人で生活を始めてみると、知貴君の稼ぎでは、なかなか切り盛りが大変なようでした。名前のある会社でも、若いうちはあまりお給料がよくありませんから」

大きな農家である夫の実家や、電力業界で役職に就いている父親の収入を基準にしたら、たいていのところは「安月給だ」と感じることだろう。それに、佐々知貴の勤め先の広告代理店は、確かに世間に名が通っているものの、大手ではない。業界の中堅どころだ。

「それで、わたしの方から折々に援助しておりました。娘はもともとキャリア志向ではありませんが、せんでしたから、専業主婦の生活が理想だったのでしょうけれど、実際にやってみるといろいろ不自由で」

——お小遣いが足りなくて、独身の友達と遊ぶ機会が減っちゃったの。こんなことなら仕事を辞めなければよかった。

「そんなふうにはぼすので……」

言って、夫人は急いで続けた。

「わたしも、独立して所帯をかまえた娘を、いつまでも甘やかすつもりはないんです。援助するたびに、優美にはお説教してきました。わたしもずっと専業主婦でしたが、けっして楽な人生ではなかった。若いころは夫の転勤で日本中を転々として、社宅暮らしをしたんです。そういうことを言い聞かせて、優美も殊勝に聞いていました」

こちらが何も言っていないのに、先回りして弁解している。

「そうしますと、経済的な問題で、自殺未遂するほど悩んでいたとは考えにくいですね。もしも突発的にその種の問題が生じたとしても、その場合は、お嬢さんは一人で悩み苦しむ前に、まずお母様に相談したはずだと考えてよろしいでしょうか」

夫人は私の顔を見て、強くうなずいた。

「はい、そう思います」

私は事務用箋にメモをとった。百均で買ったボールペンが紙の上でしゃしゃかと音をたてる。

「これは念のためにお伺いしたいのですが」

今度は、私が夫人の目を見つめた。

「ご主人は現在、東電のグループ会社の役員として、福島第一原発事故の収拾にあたっておられる。管理職として、現場を指揮する立場におられるのでしょうかね」

「そう思います……」

「現状、東電やグループ会社で働く方々に対して、世間の一部の眼差しは批判的です。お嬢さんが、お父上に向けられたその種の批判に悩んでいたという可能性はありませんか」

宮崎夫人はかなり驚いたようだった。そして、驚いてしまったことにバツが悪いような顔をした。

「あの……そうですね、主人の部下の子供さんが学校で嫌なことを言われたとか、そんな噂は耳に入ってきたことがあります」

「私はニュースで見聞きするだけです、いじめに発展しているケースもあるようです」

「そうですね。でも、うちの子供たちはもう成人していますから。それに、穀は職場の上司の方に、親父さんは元氣か、大丈夫かと、むしろ心配してもらったとかで」

「周囲の方に恵まれているんですね」

「おかげさまで、有り難いことです。優美も、それこそ子供が保育園や学校に行っていて、PTAやママ友付き合いがあるならば、そういう人間関係のなかで批判される心配もあるかもしれませんが、今はまだそんな立場ではありません」

それで幸いでした、と言う。今しみじみそう思い至ったというふうだった。

「万が一、お友達や親しい方から嫌なことを言われたとしたら、一人で抱え込んで悩んだりしないと思いますし」

「やはり、すぐお母様に相談する、と」

「はい。主人の耳には入れないように気を遣うでしょうが、わたしには打ち明けてくれると思います」

「そうですか。すみません、これは私が少々がち過ぎました」

私はそのやりとりをサツと書いて、その行の頭にバツ印をつけた。

「今の状態になる以前に、宮崎さんと佐々知貴さんとのあいだで、何かしらトラブルはありませんでしたか。口論したとか、意見が違って折り合わなかったとか」

「……なかったと思います」

夫人の口ぶりが、今まででいちばん慎重になった。

「そう思いたいです。知貴君が不満を感じていたのに、わたしが気づいてなかっただけかもしれませんから」

「穀さんと知貴さんの仲はいかがでしょう」

「お互いに忙しくて、親しく付き合っている時間がなかったと思います」

「現状ではどうでしょう。穀さんは、知貴さんの一方的な言い分とふるまいに腹を立てていませんか。あまり物事に動じない性格の青年であっても、これは怒っても不思議はない状況だと思いますが」

「いったん口を結び、夫人はまた考えた。」

「わたしも毅とは電話で話ただけですけども、声の調子では、怒っているとか気を悪くしているというのではなく、ただただ当惑しているようでした」

——知貴さん、変な夢でも見てるんじゃないのかな。

「信じられないと申していました。ええ、確かにそう申しました」

変な夢という表現がリアルだ。

「優美さんと毅さんはどんなご姉弟ですか」

夫人は困ったように首をかしげる。

「まあ、ごく普通の姉弟関係だと思います」

「お二人の両方と親しい友人や知人はおられますか」

「さあ……」

「毅さんは、あなたが私のような仕事をする者に相談することをご存じでしょうか」

「いえ、まだ話しておりません」

「しつこいようでも申し訳ありませんが、ご主人に知らせるのは、どうしても気が進みませんか」

ネイルをほどこした爪をこすり合わせながら、夫人はしばらくのあいだ考え込んでいた。

「できれば伏せておきたいです。今の主人に、家庭のことで心配をかけたくありません」

すみません、と小声で言った。

ちよっと間を置いてから、私は事務用箋の表紙を閉じた。

「では、私の方からご提案できる対応が二つあります」

夫人はまた、そわそわとまばたきを始めた。膝の上で指をよじっている。

「一つは、私立探偵や調査事務所ではなく弁護士に依頼して、優美さんに面会できるよう、正面から知貴さんに交渉することです」

宮崎夫人はつと顎を引いた。

「弁護士は大げさではありませんか」

家族間の問題ですから、と言う。

「おっしゃるとおりです。しかし私のような職業の者の立場では、このケースでお役に立てることはごく限られてしまうんですよ」

佐々優美の容態、現在受けている治療や投薬の詳細、今後の見通し。それらは全て彼女個人の医療情報であり、担当医にもアワー・ハピネス・メンタルクリニックにも、医療従事者としてその情報を守る義務がある。この守秘義務の壁は、私立探偵ではどうやって破れない。その前で立ちすくむだけだ。

だが優美の実母の依頼を受けた弁護士ならば、最小限の手間で、（佐々知貴を含む）相手方を、壁の前に据えた交渉のテーブルに引っぱり出すことができる。弁護士が現れたら、仮に佐々知貴が突っぱねようとしても、メンタルクリニックの方は黙殺できまい。

「優美さんが独身だったなら、宮崎さんは実のお母様ですから、もっと発言力が強くなるのですが」

「もう結婚してますものね。優美はわたしの娘である以前に、社会的には知貴君の妻なんですから」

「配偶者として、入院治療に必要な各種の書類への署名や、医療費の支払いも、全て彼がしているのでしょうか」

「わたしは全く何も負担しておりませんから、そのはずです」
「ですから、彼の意向が最優先されているわけです。但し」
私は指を立てた。

「だからといって、佐々知貴さんが言っていることが全て事実だとは限りません。実は優美さんはお母様に会いたがっているのに、知貴さんが邪魔しているのかもしれない。極端な話、自殺未遂の原因は彼のふるまいにあつて、それを隠したくて嘘をついているということもあり得ますよね」

宮崎夫人は口元に指をあて、目を瞠^なった。

「そんなふうにお考えになったことはありませんでしたか」

「……はい。でも、おっしゃるとおりですね。わたしも間抜けだわ」

「優美さんのことが心配で、いっぱいいっぱいなんですから、仕方がありませんよ」
こちらは当事者と違い、何でも疑ってみるのが仕事である。

「事情はどうあれ、入院中の娘を案じる母親に一ヶ月も面会させない、本人からも一切連絡させず、容態さえ知らせない。しかもその件を直接会って説明せず、全て電話だけで片付けているなんて、人としてどうかと思いますね。知貴さんがあまり深く考えず、感情に流されて今の態度をとっているのだとしたら、あなたのやっていることは非常識で、一般的には非難されて然るべきだと、しっかり教えてあげるのも必要でしょう。それには、社会的な立場が曖昧^{あいまい}な私立探偵などではなく、弁護士というカードが有効だと思います。少々お灸^{きゅう}を据える意味でも」
佐々知貴は社会人としてはまだひよっこだが、私立探偵と弁護士のどっちが強いかがうしろはわかるはずである。

「二つ目の案は」

私は指を二本立ててみせた。

「その弁護士と同じ役回りを、お身内のどなたかか、知貴さんの会社の上司など、彼に対してきちんとものを言える人に頼むことです。お二人は結婚の際に仲人を立てましたか」

「いえ、万事今風にしましたので、立てませんでした。来賓^{きへい}として、知貴君の上司にご夫婦で出席していただきました」

でも——と、夫人はまた渋る。

「会社の方に仲介を頼んだりしたら、知貴君の顔を潰^{つぶ}すことになって、余計に拗^すねられてしまうような気がします」

「なるほど。お身内はいかがですか。おじさんおばさんなど、優美さんを可愛がっておられる方を頼りませんか」

気まずそうに、宮崎夫人は下を向いた。

「夫には兄がおりますし、わたしには妹がおります。どちらの所帯ともそこそこ親しくしてきましたが、今は……まさにさつき杉村さんがおっしゃったような理由で、距離を置かれているんです」

そういうことか。

「義兄もわたしの妹の夫も、主人とは全く別の業界におります。特に義弟は、原発事故で会社はかなりダメージを受けた側でして」

夫人の首筋が、のしかかる見えない重みにまた強ばった。

「私こそ、自分で言い出しておきながら、考えが足りませんでした。そうしますと……知貴さ

んのご両親はいかがでしょうね」

夫人は気弱そうにかぶりを振る。「わたしからそんなお願いができるほどの交流がありません。もしも怒らせてしまったら、かえって面倒なことになると思いますし」

佐々知貴は、彼の両親の自慢の息子なのと言う。

「ご両親もそういう様子でしたし、知貴君本人から、たびたびそう聞かれています」

——僕は小さいころから兄貴より出来がよくって、両親に可愛がられてきたんです。

「弁護士を立てるのは気が進まないとおっしゃるのも、そのあたりに理由がありますか」

宮崎夫人は疲れたようにうなずいた。

「事を荒立てたくありません」

これは、腹を決めるしかなさそうだ。

「わかりました」と、私は言った。「優美さんが今どんな状態で、どんな治療を受けているのか、お母様と話し合う余地はないのか、せめて連絡はとれないのか。それをはっきりさせることを目的として、ご依頼をお引き受けします」

そう頼もしく聞こえたとは思わないが、夫人の表情がようやく緩んだ。

「ありがとうございます」

「その言葉はまだ早いですよ。納得できる成果をお約束することはできませんし、それ以前に、宮崎さんからの依頼では動きません」

「え？」

「事実かどうかはさておき、佐々知貴さんは、優美さんの自殺未遂の原因はお母様にあると主張している。そこへ、職権も何もないただの私立探偵が、当のお母様の代理人として乗り込ん

でいっても、知貴さんは最初から相手にしてくれないでしょう。追っ払う口実なら、いくらでも見つかります」

私立探偵？ フン。

「私を雇うのは誰か別の、優美さんの状態を心配し、事情を知りたいと思って当然で、なおかつ当面は知貴さんの非難の対象になっていない方が望ましいんです」

はあ、というような声を出してから、夫人は言った。「殺ですね」

「はい。ご主人が無理ならば、弟さんがベストでしょう。お母さんとお姉さん夫婦のあいだにトラブルがあるようで心配だが、自分は遠方について身軽に動けないので私を雇った。これなら不自然ではありませんし、知貴さんも門前払いはできません」

「そうですね、ええ、ええ」

「もちろん、契約はお母様でいいんですが」

「殺は建前上の依頼主になるということですね」

「ただし、委任状は殺さんからいただきたいですし、お尋ねしたいこともあります。私から連絡するのをお許しいただけますか」

「もちろんです。すぐにもあの子に電話して、事情をよく話しておきます」

事務的な手続きと、必要な情報をいくつか追加してもらうのに、十分ほどかかった。ちなみに、宮崎夫人は佐々知貴の携帯電話番号とメールアドレスを「お嬢さん」で登録していた。優美は「ユウちゃん」、殺は「タケ君」、夫君は「夫」だ。家族から着信があると、それぞれの顔写真が表示されるように設定してあったので、佐々夫妻とタケ君の顔写真のデータをもらった。

「ちょっと待ってくださいね。結婚披露宴の写真もあるはずですよ」

夫人がスマホを操作し、あまり慣れていないのかやや手間取って、新郎新婦がキャンドルサービスをしている写真を見つけた。新郎は白いタキシード、新婦は鮮やかなブラッドオレンジ色のドレス姿だ。

「美男美女ですね」と、私は言った。「好対のカップルだ」

管崎夫人はちらと微笑む様子もなかった。

「派手なドレスでしょう」

「よくお似合いですよ」

「芸能人みたいで、わたしは嫌でした。優美もあまり気に入っていませんでしたが、知貴君がこれがいいと言ったので」

「知貴さんは何かスポーツをしているんでしょうか。日焼けしていますね」

「大学時代のサークルのお仲間と、ときどき集まっているとか聞いたことがあります。確かホッケーじゃなかったかしら」

優美に聞けばすぐわかるんですが——と言い、急に顔を歪めて小さく笑った。

「バカなことを申し上げてごめんなさい。そんなことを優美に聞けるくらいなら、わたしがこちらをお訪ねする必要もないのに」

「ご心労が続いてお疲れなんですよ」

実際、この話し合いでも夫人はくたびれた様子だった。

「何かわかれば、些細なことでもすぐお知らせしますので、週明けまではゆっくりお休みになってください」

何度も頭を下げながら、夫人がこの（よく言えば）個人的な事務所から立ち去ると、私はコーヒークップを洗って片付け、パソコン上に新しいファイルの一つ作った。紙のファイルも新品を取り出して、メモをとった事務用箋を挟み込んだ。

それから佐々優美のフェイスブックを探して、閉じられていることを確かめた。佐々知貴の名前に会社名や「ホッケー」を足して検索すると、彼個人のページは見つからなかったが、〈昭栄大学ホッケー愛好会OBクラブ チーム・トリニティ〉のトップページがヒットした。

この代表幹事の名前の次に、幹事として「佐々知貴」の名前があった。

管崎夫人の記憶は正しく、彼は今もOBとしてホッケー競技を続けているようだ。この先、中身を閲覧する必要があるのなら、〈オフィス蛭殻〉のウェブ探偵・木田ちゃんに頼むことにしよう。

北九州市にいる管崎毅とは、その日の夜に連絡がついた。

電話の向こうの声は、実年齢とも細面の顔写真ともそぐわないバリトンで、話し方からも老成した印象を受けた。

「話は母から聞いています。失礼ですが、最初に確認させてください。着手金五千元というの

は本当ですか」

「本当です。私はいつも、最初に大金をお預かりしない方針をとっておりますので」
ちよつと間を置いてから、彼は言った。

「了解しました。母は、杉村さんは親切な銀行員のように話しやすかったと言っていました。確かに、表向きには僕が依頼主になる方が知貴さんと交渉しやすいだろうと思いますので、よろしく願います」

よし、第一段階クリアだ。

「姉のことで母は取り乱していますから、事情がわかりにくかったんじゃないかもしれませんか」

「いえ、お母様のご説明で状況はよく理解できました。それに優美さんの現状は、お母様がうろたえて当然の不自然なものだと思いますよ」

「やっぱり、第三者の目から見てもそうなんですよ」

タケ君の口調にも安堵の響きがあった。

「佐々知貴さんは、一方的にお母様を責めて、優美さんから遠ざけているだけのように見えます。それが本当に優美さんの意思によるものなのか判然としませんし」

そうですよ、彼は沈んだ声音で言った。

「僕も姉が心配なので、何とか時間をつくって帰りたいんですが……。こっちに赴任して半年ちよつとで、家族のことまで打ち明けられるほど親しい上司も先輩もいませんので、なかなか休みをもらいにくくて」

土日も休日出勤や出張で潰れてしまい、抜け出せない。今週末も研修会で動きがとれないという。

「大変ですね。無理しないでください。時間を工面して来ていただいても、お母様と同じように面会を断られてしまったら、無駄足になるだけですから」

長電話になってもいいと言うので、私は事務用箋とボールペンを取り出し、腰を据えた。

「優美さんの自殺未遂と、入院していることを知ったのはいつですか？」

「十月三日です。月曜日だったと思いますが」

週明けから残業で、夜十一時近くになってスマホを見ると、母親からの着信とメールがわんさかとあつて仰天したのだという。

「かけ直してみると、母は動転してて、姉が昨夜自殺未遂して入院してる、事情はよくわからないが知貴さんが怒つてると言うんですよ。途中から泣き出してしまって、これだけ聞き出すにも苦労しました。ともかく僕から知貴さんに連絡してみると言っ、でも携帯にかけても留守電になるだけでした」

深夜までかけ続けてみたが、やはり留守電だ。コールバックもない。

「翌日になって、姉が入院しているなら知貴さんは会社を休んでいるかもしれないと思ったんですけど、ダメ元で勤務先にかけてみたら、本人が出てきました」

タケ君の声を聞き、慌てているようだったという。

「何で会社で電話してくるんだって、尖った口調で言われたんで、母が心配している、姉さんが入院してるってどういうことかと尋ねました」

すると佐々知貴は舌打ちしたという。

「電話でも、はつきり聞こえました」

——君に心配かけたくないから口止めしておいたのに、お義母さんも使えない人だ。

——優美は、一昨日の夜中に風呂場で手首を切ったんだ。幸い怪我は大したことない。念のため入院しているけど、すぐうちに帰れる。だから毅君には知らせたくなかったのに。
「その言い方が……何というか無作法で、僕は呆れてしまってすぐには言葉が出てきませんでした」

さっさと電話を切れそうになったので、
「ともかく母も動揺しているし、死ぬほど心配している。何とか姉に会わせてやってほしいと言ったら、わかったわかった、でブツンでした」

その後はまた連絡がつかず、午後遅くなって宮崎夫人から電話があった。

「母はまた泣いていました。知貴さんから、姉の自殺未遂は母との葛藤が原因で、姉は母を怖がっている、今はともかく面会に来ないでくれ、今後のことは優美が落ち着いたら相談するからって、やっぱり一方的に言い渡された」と

その時点では、宮崎夫人とタケ君には、佐々優美がどこの病院にいるのかさえわからない。調べようもなかった。

「僕は親父に知らせろと言ったんですが、それだけは駄目だと、母は突っぱねました」

——優美がわたしのせいで自殺未遂するなんて考えられないけど、もし本当にそういうことならば、わたしが責任を持って解決しなくちゃいけない。お父さんには迷惑をかけられない。

「そして僕にも、何かわかったら知らせるから静観していてくれと言いました」

このあたりまでの経緯は、私が宮崎夫人から聞いた話と符合している。

数日後、宮崎夫人からの連絡で、タケ君は姉が救急搬送された病院からアワー・ハピネス・メンタルクリニックに移ったことを知る。

「これも知貴さんがそう言っているというだけの話で、当の本人はまたまた僕からの電話は無視なので——」

彼も、まさに私が今日そうしたようにネットで検索をかけ、クリニックに直接連絡してみた。

「患者についての問い合わせには応じてくれなかったでしょう？」

「はい。弟だと言っても駄目でした」

評判のよさそうなクリニックだったから安心する一方で、メンタルクリニックに入院するほど姉の精神状態が不安定になっているということには、あらためてショックを受けた。

「うちの姉は、万事にクヨクヨ思い悩むタイプじゃありません。基本的に明るいし、勝ち気なところもあります。頭の回転も速いですから、喧嘩すると、僕なんかいつも言い負かされてばかりでした」

「これまで、ご家族のあいだで深刻な揉め事や喧嘩はありましたか」

「ありません。少なくとも、僕はあったと思いません」

タケ君は冷静に考えてしゃべっている。

「父も母も、姉には甘いんです。僕の幼なじみが、姉のことを「お姫様」と呼んでいるくらいです。僕もまったくそのとおりだと思いますし、母と姉がべったりなのは、知貴さんには鬱陶しいだろうとも思いますが、今まで姉妹みたいに仲良くやってきたのに、ある日突然姉が母の干渉を嫌がって、自殺未遂するほど思い詰めてしまうなんて考えられない」

話しているうちに、その口調にかすかな怒気が混じり始めた。

「確かに、母は姉に対して干渉すぎなところがあります。これは母にも言いました。ですが姉の方も母が頼りで、昔から何でも母に相談していましたし、就職してからも、結婚してから

もずっと、しょっちゅう小遣いをねだっていた。まあ、これは母だけじゃなくて父に対しても同じですが」

自分の家族をよく観察しているようだ。

「そんな姉が母に圧迫されてるとか、母が怖いとか……僕には、まるっきり絵空事にしか思えません」

言って、電話でも聞こえるほど太いため息をついた。

「あれから母は何度もクリニックに出かけているのに、ずっと門前払いで姉に会えないまま、連絡もとれない。おかし過ぎますよ。こんなことになる以前は、週に何度もメールをやりとりしていたらしいのに」

私が宮崎夫人に聞いた限りでは、この事態に陥る前、夫人が娘と最後に連絡を取り合ったのもメールで、九月三十日の昼過ぎのことだったという。

「その日は金曜日でしたから、お母様は優美さんに、週末はどうするのか、実家に顔を出すかとお尋ねになったそうです」

「姉と知貴さんは、よく実家に来ていたみたいですからね」

すると佐々優美は、今夜はトモ君と出かけるから、週末の予定はまだわからない、明日また連絡すると返事を寄越した。それっきり、土日はメールも電話もなかった。宮崎夫人は、自身も友人と外出したりしていたのでさほど気にしなかったのだが、日曜日の夕方まで、娘からまったく音沙汰がない。こんなことは珍しいので、

〈風邪でもひいたの？ 返事ください〉

とメールを送った。しかし月曜日になっても優美から返信はなく、携帯電話にかけても留守

番電話になっている。だんだん心配になってきて、佐々知貴の携帯電話に連絡し、それもなかなか通じずに、夜十時過ぎになってやっと彼をつかまえることができて、優美の自殺未遂を知った——という流れである。

「そのあたりの経緯は、初めて聞きました。じゃあ母が電話するまでは、知貴さんは黙ってたんですね」

「そういうことです。佐々さんの方からお母様に連絡があったのではない。お母様が問い合わせ、初めて事情が明らかになったんです」

当時、宮崎夫人は佐々知貴を難詰した。

——こんな大事なこと、どうしてその時すぐ知らせてくれなかったの！

すると佐々知貴は、自分はお義母さんも優美も傷つけないから黙っていた、お義母さんが毒親だなんて言いたくないなどと応じ、このままでは絶縁だけど自分はそんな悲しい事態は避けたい、だからお義母さんも協力的になって、おとなしくしててくださいと言ったそうである。

「ああ、〈毒親〉は、僕にも言っていました」

「近頃、よく耳にする言葉ではありますね」

「だけどうちの姉貴には関係ないですよ」

〈姉〉から〈姉貴〉になった。

「なんていったらいいのか……。うちの姉貴はそういうことを考えたり話題にしたりするタイプじゃないんです。弟の僕のみから見てもお姫様ですし、いくつになっても女の子なんですから」

タケ君の言わんとすることは、私にも何となくわかった。

「本当に姉貴がそんなことを口走っているのだとしたら、誰かに吹き込まれたとは思えませんが。あるいは、筋が通らないとわかっていながら嘘をついているか、どっちかです」

事務用箋に記した人物表の〈佐々知貴〉のところにボールペンのペン先を置いて、私は尋ねた。

「お母様からお話を伺ったとき、最初に私の頭に浮かんだのは、優美さんが知貴さんと夫婦喧嘩をして、それが拗れて自殺未遂騒動になってしまったのではないか、ということでした。そして優美さんが夫を庇っているか、あるいは知貴さんの方がバツが悪くて、別の筋書きを作っているか、隠そうとしている」

タケ君はまったく迷わず、即答した。

「ええ、僕もそう思います。それなら普通に想像できる範囲内のトラブルだし、もっともありそうですから、母には言いにくかったのですが、最初からそのあたりの線を疑っていました」

私はうなずき、佐々知貴の名前にアンダーラインを引いた。

「お母様に言いにくかったのは、お義兄さんの悪口を吹き込むような形になるからですか？」

今度は、ちょっと間が空いた。

「そうですね。もともと僕は、知貴さんとあんまりウマが合わないのです……」

宮崎夫人は、互いに忙しいから親しくする時間がなかっただろうと言っていたが。

「親しくなれなかったという意味でしょうか」

「はい。知貴さんは、もし同級生として出会っていたら友達にはならないタイプです」

残念ながら、そういう〈合わない〉タイプの人間と姻族になってしまうことが、世間ではま

まある。

「これまでは顔や態度に出さないように気をつけてきましたから、知貴さん本人にも、母にも姉にも覚られていないと思います。僕がどう思おうが、姉貴は知貴さんにベタ惚れですから、余計なことは言えませんでしたし」

しかし今は非常事態だ。

「今度のことで、姉貴に面会させず、声も聞かせず、一方的に母を責めるやり方はよくないと思う、僕も腹立たしく思っているということは、知貴さんにも母にもはっきり言いました」

「佐々さんに責められていろいろ思い悩んでいるお母様にとっては、励ましになる言葉だったと思いますよ」

「それならよかったのですが……」

「不睦ですが、参考のためにお伺いしたいので、お許しください。殺さんは、佐々知貴さんのどんなところが自分とは合わないと感じるんですか」

しばらくのあいだ、彼は考えていた。私はボールペンを手にしたまま待った。

「——一言で言うなら、いわゆる〈俺様〉なところですよ」

言って、急いで続けた。

「僕が義弟だから格下認定しているのであって、他の人にはそうじゃないのかもしれない。これはあくまでも僕の個人的な感想ですから、そのへんは……」

「ええ、わかります」

タケ君はあくまでも公平を期している。

「就活している時期に、僕の意思や意見を青いとか見通しが甘いとか言って、何かとクサして

きたんです」

——人生の先輩の助言をよく聞けよ。弟のくせに、兄貴の僕の意見を尊重せずに、あとで後悔したって助けてやらないぞ。

「頼んでもいないのに、金融関係や商社に勤めている先輩に紹介してやるから会いに行けと勝手に場を設定されたりして、かなり迷惑しました」

僕は最初からメーカー志望でしたから、と言う。

「今の勤め先は第一志望のところで、工作機械と重機のメーカーです。内定がとれたとき、両親も姉も喜んでくれましたが、知貴さんは渋い顔で」

——バカだなあ。僕や僕の仲間や先輩たちと比べたら、生涯賃金で一億円近い差がつくの。」「ずいぶん下げられたんですね」

私はつい苦笑してしまった。

「金融でも商社でも広告代理店でもピンキリで、みんな給料がいいわけじゃないのにね。年収だけで就職先を選ぶのもどうかと思いますし」

「杉村さんはサラリーマン経験がおりなんですか」

「はい。銀行員ではありませんが」

「人見知りなどところのあるうちの母が、なぜ杉村さんにはすぐ打ち解けられたのか、何となくわかりました」

これは好意的な評価なのだろう。ありがとうございますと、私は言った。

「すみません、まだお会いしたこともないのに、こんなにズケズケと」

「私がお尋ねしたんですから」

「僕のこの物言いも一方的ですよ。フェアじゃない」

「現状、まず佐々知貴さんがフェアではないんですから、おあいこですよ」

宮崎夫人もタケ君も、この一ヶ月、心配と怒りで心の内圧が高まっていたのだろう。私が蓋を開けたので蒸気が噴き出してきたのだ。母は泣き、息子は憤慨している。

それでも、この母と息子の精神的圧力釜は高性能で、耐久性が高い。そうでなかったら、とくに蓋が飛んで大悶着おもんじやうになっていたはずだ。父親である宮崎氏に知らせたくないという重しもあり、宮崎家側は一ヶ月も我慢しすぎたくらいだと私は思う。

「杉村さんを雇ったことを、僕の方から知貴さんに知らせておきましょうか」

「それには及びません。最初は素手で握手しに行ってみることにします。いきなり本人にぶつかると、少し周辺を調べてみて……まあ外堀を埋めると言いますかね、それから会った方が効果的だとも思いますから」

その感触次第で、タケ君に援護射撃してもらおうとしよう。

「お手数ですが、委任状をいただきたいのです。郵送しますので、署名捺印なういんして返送してください。結構です」

「了解しました」

進展があってもなくても、彼と宮崎夫人に毎日報告メールを入れること、二人の側で何か動きがあったら、二十四時間いつでも知らせてくれていいことを告げて、話を終えた。